

第4回ESDティーチャー・フォローアップ研修会 概要報告

大西 浩明

- ◇日時 2025 年 11 月 11 日（火）19 時～20 時 30 分
- ◇方法 Zoom によるオンライン方式
- ◇参加者 20 名

- ◇実践報告 奈良県天理市立福住小中学校 堀川淳司先生
「福住小中学校の ESD 実践 ～『福住学』を中心としたホールスクールアプローチ～」

【実践概要】

児童・生徒数減少により、小中学校に 現在 1 年～9 年までで 90 名
そのうち 4 割は天理市内全域からからの通学、3 割が昔からの居住者、3 割が他地域からの移住者
「福住学」をカリキュラムとして位置付け、各学年で実施している

○耕作放棄茶畑を活用したお茶の栽培とブランド化の取組

- もともと 500 軒以上あった栽培農家が 1 軒に
- 耕作放棄されたお茶の木から枝ごと茶葉を刈り取る（無農薬）
- そこから切り取った茶葉を焙煎し、「里山三年晩茶」として商品化
- 無印良品にて販売
- ハーブ栽培 三年晩茶とブレンドしたらどうだろう？
- 4 種類のブレンド茶を全校で味わい投票
- 選ばれたお茶「里山を守るお茶」「人と人をつなぐお茶」
- 経費は、株式会社フェリシモのクラウドファンディング型のポイントプログラムによって商品化



○黒大豆栽培からの味噌づくり

- 地域の人に教えてもらって味噌づくり → 給食の材料に

○「大和ルージュ」の栽培

- 天理市の種苗会社が開発した新種の赤いトウモロコシ
- 種植えから小中いっしょに栽培 天理市内の給食の献立に
- 地域の方が大和ルージュをコーンスープに商品化
- パッケージのデザインを小学校 1・2 年が作成



○無農薬にこだわった米づくり

- 3 年前、5・6 年生が耕作放棄地を一から開墾して実施 今年 4 年目のチャレンジ
- 粃まきから始めたが発芽した段階で全滅 → 地域の人から苗をいただく
- ポット苗だったので田植えのときに根を切らないで済む
- 田おこし、代掻き（馬鍬を使って）、田植え（田植え枠を使って）
- 米ぬかぼかし（水を濁らせて光合成を抑制し雑草を減らす、肥料にもなる） 2 回散布

稲刈り はぎ干し（毎日水分量を測定）・・・算数の「平均」の学習に
足踏み脱穀機を使った脱穀 とうみを使った選別作業
52 kgの米を収穫 昨年は10 kgしか獲れなかった
今年は米粉パーティをしたい

○堆肥づくり

地域の人に教えてもらおうと、わずか1日で発酵して60℃に
このあと堆肥舎を校庭につくって、米ぬかぼかしを作る予定

○炭づくり

教師が地域の炭づくりを見学

→ 中学部の若い先生たちが奮起

運動場に炭窯をつくる すでに2回炭づくりに挑戦

使える炭まで炭化しているかは電気を通してテスターで調べる

中学生が炭窯の横にピザ窯を制作

米粉ピザをつくって全校にふるまってくれた



○植林活動

クヌギ、マテバシイなど

クヌギは9～10年で大きくなるので、入学して卒業するときには伐採できるようになればいいな
と思っている。

○シイタケ栽培

小中いっしょに

○甘葛（あまづら）づくり

福住は「氷室の里」 奈良時代、氷室があって夏には氷を都まで貴族のために運んでいた

シロップの役割をしていたのが、ツタの木から採取する甘葛

切ったツタの木を振ると中から白い液が出てくる

糖度18.8% 甘すぎない甘さ

氷室神社の方、奈良女子大学の研究者に協力いただく

かき氷で堪能



○ヤマトサンショウウオの保護活動（生物部）

絶滅寸前種 3年かけて近くで発見

有機栽培をしている場所には生息している

「人にも環境にもやさしい里山づくり」をめざす

環境省に協力いただき、トラップづくり

今年はクマの出没で山に入れず

地域、行政、研究機関とも連携しての保護活動



【意見交流から】

○外部との連携についてどのようにされているのか詳しく聞かせてほしい

→ 小中それぞれに ESD 担当を置いて、そこが窓口になっている。校長が補佐してくれている。
100 名以上の方に協力していただいている。

○9 年間にまたがるカリキュラムを学校として作成しているのか？

→ 「福住学」のカリキュラムは作っているが、毎年リニューアルしている。
子どもの思いや教師の得手、関心は毎年変わってくるので。

○教員間での温度差はないのか？ それをどのように改善されているのか？

→ 職員間でのコミュニケーションがまずは大事だが、自然とそれができているのが強み。
若い先生の「こんなことやりたい」はできるだけ吸い上げる。
先生が楽しんでやっている様子を他の先生が見ると、自分もやりたくなる。

○子どもたちの変容について具体的に教えてほしい。

→ 山の子どもたちなので、どうしてもコミュニケーション力は弱い。しかし、様々な取組によって
自信となり、発表会などにも積極的に参加するようになってきた。

○子どもたちの「こんなことをしたい」という思いが、地域をどのように動かしているか？

→ 地域が有機栽培米に本気で取り組み始めた。
そこから日本酒造りのプロジェクトが始まっている。
耕作放棄地を何とかしようとする動きが出てきた。

○今いる先生たちが異動されたら、これらの活動がつながっていくと思うか？

→ ESD ティーチャープログラムに毎年参加して認証を得る。
仕掛けが大事。5・6 年の米づくりに 4 年生が自分からやってきて手伝う。
米ぬかぼかしは、来年米づくりをする 4 年生が担当する。

○2 学年で同じ活動をしているが、毎年重複してしまわないのか？

→ 同じ活動をしていても関わり方が違っている。同じ米づくりでも、去年はこうだったが今年はこれを
やりたいという思いから内容が変わってくる。

○職員同士でいろんな話をしていく中で、多くのアイデアが生まれてくる。学校に文化が根付いている
からだと感じる。

○子ども、先生、地域とも、みんなのウェルビーイングにつながっていると思う。